

第4回JR松山駅周辺まちづくりシンポジウム《概要》

日時：平成27年8月22日（土）13:30～16:30

場所：国際ホテル松山 本館（常磐）

次第（敬称略）：

〔挨拶〕市長挨拶（13:30～）

野志 克仁（松山市長）

〔第1部〕基調講演（13:45～）

本杉 省三（日本大学 理工学部 建築学科 教授）

〔第2部〕パネル・ディスカッション（14:45～）

■パネリスト

本杉 省三

伊東 正示（㈱シアターワークショップ 代表取締役）

徳永 高志（アートNPOカコア 理事長）

永井 由起（元松山駅周辺まちづくり審議会委員）

■コーディネーター

加藤 武志（コミュニケーションデザイナー）

（以下敬称略）

1. 挨拶（松山市長 野志 克仁）

松山市では、愛媛県による鉄道高架事業に合わせて、土地区画整理事業をはじめとする松山駅周辺整備事業を実施し、松山駅周辺地区を県都の陸の玄関口にふさわしい新たな交流と賑わいを生む魅力ある都市空間として整備することを重要課題として取り組んでいます。

今年の5月、車両基地跡地をまつやま情報文化拠点として整備することを目指した基本構想を公表しました。この構想は、有識者や地元市民、関係団体、公募市民などからなる松山駅周辺まちづくり審議会や、パブリックコメントなどを経て策定したものです。今後は、専門家などを交えた市民による活発な検討を行いながら、30年後、50年後でも真に必要とされる、愛されるものを目指したいと考えています。

今後もこの基本構想が目指すまちづくりの推進にご理解とご協力をお願い申し上げるとともに、今日のシンポジウムが有意義なものになることを心から祈念し、開会のご挨拶とさせていただきます。

2. 「松山駅周辺地区車両基地跡地利用に関する基本構想」の発表

（5月に公表された概要を元に事務局より説明。）

3. 第1部：基調講演（日本大学 理工学部 建築学科 教授 本杉 省三）

今回は、「公共空間としての広場と公立ホール」というテーマでお話します。

例えば、昔の京都四条河原では、川岸に芝居小屋がいくつも群がっており、川も含めて非常に開かれた場所になっていました。そのような場所に、今日のテーマである劇場やホールなどが建設されてきた

というところから見ても、劇場・ホールは公共性の非常に高い施設であるということを示していると思っています。また、一般的に公共空間と聞いて想像するのは、木が植樹されてベンチが置いてあり休憩できる場所であったり、時にはイベントにより人がたくさん集まるような場所であったりすると思います。一方、自動車が通行するための道路でマラソン大会を実施したり、何となく広い場所でパーティーやパフォーマンスを催したりする場合も、その空間は公共空間と言えると思います。公共空間と言えば、1つの決まったイメージは存在しているかもしれませんが、1つの目的で作られたものが多様に使われる点に注目して、今日はお話したいと思います。

日本語で「公共空間」や「公共」と言うと、どうもしっくりこない感じがします。その理由は、「公」という言葉が、何か作られている印象があり、広く開かれているという感じがしない点が挙げられます。英語では、「公共空間」は「パブリックスペース」と訳されますが、「みんなの」という感じが伝わります。また、ドイツ語では、「Öffentlich」と訳され、この動詞型が「offen」となります。この意味は開いているや遮るものがないという意味であり、私たちが目指す公共空間はこのような意味が正しいと思います。

「公共」は非常に重要な言葉です。近年、自治体がしっかりしてきたためにサービスとしての「公共」が広く認識されるようになったために、そこで提供されるサービスを受け取る立場に立ち、自分たちが主体的に「公共」に対して働きかけることがなくなりつつあるのではないかとされています。一方、オフィスビルの一部開放やホテルのロビーなど、私企業が社会貢献としての「公共」を発揮している場合も見られます。公共空間を考えるにあたって、あるいは私的空間との違いを考えるにあたっては、以下の2つの点が非常に重要であると思っています。

①行為の複数性が存在する（他人がいる）

②予測不可能性を内包している（他人がいるために、自分の考えと違う行為が行われる）

公共空間では、人の意見をお互いに受け入れ合うということが非常に重要なことであり、それが成り立っている場所が公共空間と言えると思います。そこには社会的な批判性や人間の喜びの表現など、対立する行為や概念を認め合う場合も含まれますが、その認め合いの場所であるということは非常に重要であると思っています。

イギリス首相のチャーチルの言葉に「私たちは人が得るもので生計を立てるけれども、人に与えているもので人生を築いている」というものがあります。私たちは常に欲求から行動を起こしますが、人にサービスして喜んでもらう、自分から他人に働きかけることで、大きな喜びを得るというような言い方になっていて、公共空間を考えるときにこの言葉の方向性は当たっているのではないかとと思っています。

「パブリック」という言葉からは、パブが思い出されます。私たちは、ビールを飲む場所と思っていますが、もともとはみんなが集まってくる場所のことをパブリックハウスと呼んでいて、その言葉がパブに変わったそうです。自分たちだけでなく周りの人たちも楽しんでもらうという考え方が、劇場やホールといった文化施設を考えるときの1つの留意点になるかと思っています。

「文化施設は変われるか」、私はぜひ変わってほしいと思っていますし、特に東日本大震災の被災地を見て痛切に感じています。他人が持っているから自分も欲しい、他市にあるから自分たちの市にもじゃなく、自分たちのものをつくるんだという、それぞれの主体性で参加し、一人一人が頑張りつつも、みんなで寄り添いあって分かちあっていく、建築物としても1つで完成とするのではなくて、様々な施設と連携していくことで機能が充実していくような作り方ができないかと思っています。

このようなことから、「パブリック」「コモン」「シェア」という、開かれていてみんなで使え、分か

ちあえる場所として広場や劇場を捉えていきたいと思います。そのためには、以下の3つのポイントが大事であると思っています。

①他者（自分中心で考えるのではなく、他者との関係をどう作っていくか）

②安心（関係をつくっていくための場所は安全でなければならない）

③楽しみ（関係をつくるにあたり、楽しみの空間としなければならない）

これらの内容を私の短い講演の中から少しでも考えていただくことができれば幸いです。では、海外や日本の例をお示ししながらお話していきたいと思います。

ドイツのフライブルグにミュンスター教会があります。教会はもともと人が集まる場所となっており、そのために教会前に広場ができ、その周りにお店ができるといった流れになっています。日本でも春日大社や北野天満宮などの神社の境内で能や歌舞伎が行われるなど、宗教的な建築の前での空間が形成されています。このように宗教的な場所は誰でも入れる場所であって、そこが広場になり、劇場も同時にできていったという流れは大変興味深いと思っています。

パリのポンピドー・センターは、パリで最も人が集まる場所として知られています。非常に大きな建物で、中の広場に設けられた緩やかなスロープを用いて、あちらこちらでストリートパフォーマンスが行われています。このように使われることを想定して作った訳ではないと思いますが、非常に興味深い空間として捉えられます。パフォーマーの正面に多くの人が集まっていますが、側面や後ろ側、少し離れた日陰など、様々な方面からパフォーマーを取り囲んでいます。前の方の人は、後ろの方の人が見えやすいように気配りをしているし、楽しんでいる人の顔も見て楽しむといった、様々な楽しみ方を自分で見つけ出しています。このようなことが広場や劇場の大事なことだと思っています。

また、ロンドンのグローブ座では、都市の中心部から邪魔者扱いされて外に出た劇場に関連してまちができてきて、賑わいが賑わいを呼んでいます。ここでは、芝居小屋や茶屋などの様々な機能がまちに分散していることで賑わいがさらに人を呼ぶ構造になっています。

外の空間では、オーストリアの小さな町のお城の中庭でフェスティバルを毎年開催しています。もとの使い方とは違いますが、仮設照明なども置きながら音楽の演奏会場として使われています。日本では広い庭園を解放して踊って自分たちも楽しむ、また踊っている人たちを見て楽しむといった構図があると思います。

ちょっと変わったところでは、デュッセルドルフで7月中旬に行われる移動遊園地は非常に多くのお客さんで溢れています。また、ミュンヘンのオクトーバーフェストに行くと、非常にウキウキします。それは、他の人が楽しんでいるから楽しい、様々な人がいて楽しんでいるから私たちも楽しくなるといった循環だと思います。これは劇場も全く一緒に、劇場も広場も他人がいるから楽しい、他人との関係の中で自分をどのように位置付けられるかという空間であり、その関係があるがゆえに、空間としての意味があるんだと思います。

日本では、勧進の興行は江戸時代にも非常に広く行われています。お金集めのためと言いつつも、当時の絵を見ると、非常にたくさんの方が集まっていて、お祭りの催しでもあったと伺えます。また、昔の京都四条河原を描写した絵では、河原遊びをする人がいて、そこにムシロで覆ったような催しをするような場所ができ、芝居に発展し、それを楽しみにしていろんな人が遊びに来る様子が描かれています。幅広く誰でも行ける場所として、このような広場的な空間は都市の中に存在していたし、今でも存在してほしいと思っています。

このような場所はだんだんと少なくなっていくかもしれませんが、だからこそ誰でも行けて、みんな

など分かち合える場所が必要で、劇場もそのような場所であってほしいということです。それを1つの現代的なやり方でみせているのが、オスロのオペラハウスです。港に隣接して整備されていますが、建物が海に向かって滑り台のような形になっていて、建物の中に入らずとも海から建物の屋上に行ってまた戻てくることができます。建築物が広場と一体的になった事例です。日本の長谷寺も自然の地形を生かして建築物と人が集まる場所が一体的になった事例であると思います。

まち全体が広場になるというパターンはたくさんあります。スイスのベルンでは、まちのあちこちで音楽やダンス、演劇や人形劇が行われるようなお祭があり、そのときはまちじゅうがパフォーマンスの場所になっています。また、一箇所で大々的にイベントを行ったものとして、ドイツのベルリンの国立歌劇場が改修中で利用できない期間のイベントとして、劇場前的大通りに屋根を付けてオーケストラ付きのオペラの公演を行った例があります。このようなときに、お客さんがどのように道端でこれをみているのかも見ていただけると面白いと思います。

ベルリン・フィルハーモニーの劇場は、舞台を中心にお客さんが取り囲むようなホールになっています。1963年にこのホールができるまでは、このような形はありませんでしたが、今ではこのような形がポピュラーになってきました。このホールはブドウ畑を建築空間として再編集したと言われています。みんなで音楽を楽しむ、観衆も音楽を作っているんだという考え方でコンサートホールが作られた最初の事例です。ホール内は少し分かりにくいつくりになっていますが、ベルリンの人たちはこの場所がよいと自慢します。外から来た人には分かりにくくても、自分には分かる場所がよい場所となるわけで、マイナスもプラスも見方次第で変わってくるということです。

環境や地形、風景といったものが建築化されて、劇場空間化されたものとして、日本の伝統的な芝居小屋もまさにその通りだと思います。栈敷席は昔からありましたが、通りに面していろんなお祭りが行われたときに、それを上手く楽しんで見るために栈敷席が設けられました。それが歌舞伎小屋にも作られたということです。例えば、幼稚園の遠足に行くときに前日から持ち物を用意してワクワクした気分で遠足に行かれたと思いますが、楽しむ側にも楽しむ側なりの準備があつて、それが楽しみを倍増させていくということです。自分が参加していくことでその空間をよりよく、より自分のものにしていくということが劇場空間の中にあるといいのだろうと思います。

イギリスのウエストヨークシャープレイハウスという建物は、外観は安いスーパーマーケットのような感じがしますが、楽屋口はありませんが、自分たちの小さなコミュニティのための施設としてそのようなものであつていいという考え方で作られています。先ほどのオスロの大理石のオペラハウスではなくて、このようなものでいいという考え方です。オスロのオペラハウスも反対運動が起きましたが、実際につくれば人が集まりました。また、大理石は地中海から持ってきたもので地場産ではありませんが、だからこそ別の価値が生まれたとも言えます。

また、工事途中でコストがかかりすぎだと話題になり、工事が止まっていた施設の中でもコンサートが行われた事例が **Elbphilharmonie Hamburg** であります。工事用の大きなエレベーターで入場したり、安全のためにあちこちに人が配置されているのですが、工事中の建物をこのように使えるというのは私にとって本当に驚きで、パブリックスペースとしてあつていいのだろうと思います。完成したら「はいどうぞ」ではなく、完成する前からこういうことも行えるし、運営する側にも市の側にも広い精神があるということが分かります。

みなさんご存知のシドニーのオペラハウスですが、最も新しい建築物としての世界遺産となっています。岬の先端にあります、建物周辺がパブリックスペースとして開かれているために、岬周辺を回れ

るようになっている点が優れています。

劇場には、様々な機能があり、どちらの機能に重心があるかによって劇場になったり、図書館になったり、美術館になったりするものだと思っています。そのときに、公平性があると言われるようなパブリックスペースにするのか、劇場にするのかということはみんなが考えなければならないところであり、個人的には、公共のために開かれた、様々な可能性や他の人たちを受け入れていくような空間を作っていけないかと思っています。そういうものが、今後の活動や都市の文化につながっていくのではないかと思います。

以上で終わります。

4. 第2部：パネル・ディスカッション

■パネリスト

本杉 省三

伊東 正示（㈱シアターワークショップ 代表取締役）

徳永 高志（アートNPOカコア 理事長）

永井 由起（元松山駅周辺まちづくり審議会委員）

■コーディネーター

加藤 武志（コミュニケーションデザイナー）

【加藤】

今からパネル・ディスカッションを始めさせていただきます。先ほどご紹介に預かりました加藤武志と申します。よろしくお願いします。

まず最初に、今日はここに4人のパネリストの方がいらっしゃいます。先ほど本杉先生は少しお話をしてくださいましたが、伊東さん、永井さん、徳永さん、自己紹介も兼ねて、それぞれの活動の紹介と、松山の印象なども含めてお一人ずつご紹介いただけたらと思います。

【伊東】

伊東です。よろしくお願いいたします。今日はこういう場に呼んでいただきましてありがとうございます。私成城学園という学校に小学校から高校までいまして、小学校の授業に劇とか舞踊とか映画などがあり、子どものころから芝居好きでした。大学で建築を学びまして、芝居と建築が会う場所ということでずっと劇場建築の研究をしております。本杉さんとは文化庁で一緒に仕事をさせていただきましたし、加藤さんとは名古屋と下呂で一緒にやらせていただいて、徳永さんとは今伊予市でホールを作っているということで、みんな同じ仲間です。

私はもともと建築家なのですが、建物を作るだけではなくて、でき上がった後の運営もやりたいということで、実際に四国は高知のかるぽと、それから県民ホール、この2つの施設は指定管理者として今運営に携わっております。それから、民間の施設、東京の渋谷のヒカリエというホールの運営などもやっております。それから、いろんな財団の理事ですとか自主事業のアドバイザーといった形で仕事させていただいております。

私の会社は、建物、劇場を作りたいぞというスタートのところから始まって、消えてなくなるまで何でもやらせていただきたいということで仕事をしています。特に住民参加型のファシリテートというの

が今大きな仕事になっています。

代表例の1つは黒部のコラーレという建物ですが、多分日本の公共ホールで市民参加型の一番最初のプロジェクトかと思います。最初の基本構想を作る段階から市民の皆さんとずっと検討しながら作っていったものです。市民の意見を反映させながら施設の構成をし、それから運営も市民の皆さんが中心になって運営をしているということです。ですから、計画段階で市民の皆さんが言いたい放題言うだけではなくて、言ったことの責任を取って自分たちの力で運営をやっているというものです。

北上のさくらホールの特徴も市民参加型でやってきたホールです。大きなホールが両サイドに2つあり、真ん中のゾーンがアートファクトリーと呼んでいる21の貸室が集まった空間になっています。音楽練習室、大道具の制作場、録音スタジオがあり、アートの工場みたいな場所ですね。これがあることによって日常的にいつも人が集まってきています。そういった部屋を全部ガラス張りにして覗けるようになっています。そうすると、フラッと来た人が中の様子が覗けるというような交流も生まれてきています。こんな感じでいつも誰か人がいる。人が人を呼ぶみたいな構造になっています。

市民フェスティバルのような市民企画もかなりたくさんやってきています。公共ホールで12月31日から1月1日を開館しているところは滅多にないと思うのですが、オールナイトカウントダウンライブをやった経験もあります。

次は茅野市民館です。これは徳永さんも今関係していただいていますのでまたお話があるかと思いますが、ここも徹底的に市民参加でやってきています。半年間で基本計画をまとめているのですが、市民ワークショップをその半年間で52回やっています。これは本格的な劇場なのですが、1階の客席が全部収納できるようになっています。そうすると展示スペースとして活用できます。劇場と美術館が併設されていて、両方の施設として使う空間を作ってきたというものです。完成するまでに200回ぐらい市民ワークショップをやっているのではないかと思います。その人たちは、産みの親でもありますから、やっぱり子どもを産んだ以上は育てなければならないということで、責任を取って皆さんでアートNPOを作って、今でも運営に積極的に携わってくださっています。

様々なホールで市民参加をやってきています。ただワークショップをやるだけではなかなか市民を巻き込むことはできないので、子どもたちを集めて絵を描いたり、いろんなイベントをオープン前に仕掛けています。

都城市でも、いろんな形で市民に参加してもらっていますが、結局市民の皆さんが頑張ってもレベルアップは難しいんですね。そこに専門家の力というのは必ず必要になってきて、服部克久さんをお願いして、彼が看板になりながらプロとの間をつないでくれるようなことをやってきています。

町田市の鶴川に作ったホールですが、ここでもやはり同じようにオープニングの事業を市民の皆さんで考えてもらってやったものです。

三次市もそうです。興味のない人は関心を持たないので、普通のかわら版を作ってもインパクトはないだろうということで、「ポポロ館長来たり、本当か?!」みたいな大きな文字を使った広報誌で興味を引こうとするなど、より広く情報を流したりということをやっています。

伊予市では、図書館と文化ホールと合築を計画しており、ここでもワークショップを続けています。その中で近隣のホールや図書館の見学会を開催したり、市民の皆さんと一緒に作ってきています。

【徳永】

徳永です。今日、アートNPOカコアの理事長としてお話しするのですが、正式名称はNPO法人ク

オリティアンドコミュニケーションオブアーツというとても長いので、頭文字を取って QACOA でカ
コアという NPO の代表をしています。もう 1 つは伊東さんからご紹介いただきましたように、公共文
化施設のスタッフとしてさまざまなところに関わっております。先ほどご紹介いただきましたが、茅野
市民館、それから伊予市の複合文化施設、県内では内子座、県外では兵庫県の南あわじ市の淡路人形座、
それから神戸市にも多少関わっております。それから、3 つ目としては研究者として、古い劇場いわゆ
る芝居小屋と言われる劇場の研究者として活動しておりまして、内子座にも関わっております。内子座
が 2016 年 2 月に 100 周年を迎えるので、100 周年に当たっての様々なことに関わっております。大学
では今年は慶応義塾大学大学院でアートマネジメントを教えています。

今日は、松山市の文化事業、市民の文化活動ということで、前半は 10 周年になる私どもの NPO の活
動を振り返りつつ、松山におけるちょっと変わった市民の文化活動の状況をご紹介して、後半は伊東さ
んが取り上げていただいた茅野市民館のコアアドバイザーとして、市民の文化活動と公共文化施設をど
のようにリンクするのかという話をさせていただければと思います。

「オルタナティブスペースのアート活動」というタイトルをつけました。オルタナティブを辞書を引
くと代替手段と書いてあります。要するに立派な文化施設の中ではない場所でのアート活動というこ
とでご紹介させていただきます。

私たちの NPO は最初から中間支援をしようと考えました。10 年前には「クオリティの高い芸術は人々
に時代を見抜く力や想像力の向上をもたらすとともに、人や社会のコミュニケーションを活性化させる
力があります。私たちカコアはこのような芸術の特質に注目し、その振興と活用を目指します」という
言葉を全員の名刺の裏に印刷していた時代があります。中間支援の意味について必ず問われるので、こ
ういう言葉を持って、とりわけコンテンポラリーアートの地域での役割に着目して活動を始めました。

2003 年よりアート NPO という言葉が出始めていたので、松山市の港町である三津浜の築約 100 年
の蔵をスペースとして活動を開始して、2004 年に NPO 法人の認証がありました。

地域資源やつなぎ手をどう考えるのか。また、当時の三津浜は空き家が増え、1 年に 1 回は火事、2
年に 1 人ぐらい亡くなる状態で、そこをどうにかしたいという流れで、蔵を利用したアート活動が始ま
りました。当時、地域の団体である平成船手組とカコアが協働してアート蔵の運営をして、三津浜のイ
ベントに協力をしながら、我々は我々のイベントもやろうと考えて活動していました。今もセレクトシ
ョップになって残っているのですが、100 年の蔵をまずちょっと華やかにしようというので、地元のア
ーティストさんと蔵を飾るということをしました。

「多様で理解不能な他者が共存する現代社会」、それを生き抜く、その人たちと一緒に様々なことを
考えなければいけないというのは、これはアートのスキルだと思います。アートの世界だけは価値観は
バラバラでいいんです。例えばベートーヴェンやルノアールがよくないと言っても許される世界なん
ですよね。だから、アートというのは多様性を認めるものなので、こういったことを理解するスキルは必
要です。

一方で、文化・芸術はみんなが楽しめるもの、多数の市民がこぞって参加して楽しめるものはアート
しかないという言い方をされる方もいます。先ほど本杉さんが最後のところで、やっぱり公共のために
文化施設はあるといいよねというお話をされましたが、窓口を広げるという意味で多数の市民の参加も
考えながら取り組んでいます。

個別の事業をたくさんやれば楽しいのですが、その都度に疲れるし、これでいいのだろうかというこ
とを活動する中で考えるようになりました。各地のアート活動の中で、文化施設は文化施設で閉じられ

ていて、アートはアートで取り組んでいる状況が多かったために、2006 年ごろから各地でアートプラットフォーム構想が出てきて、横浜や神戸、金沢などで構想がいろいろ取り上げられました。これらはすべて行政主導でしたが、松山では、3 つの NPO が協働してアートプラットフォームえひめとして考えました。10 カ月で貸主に返さなければならないという結果になりましたが、2009 年 6 月に中心市街地にこの拠点を開館した。

今は、パブリックなものを形成していくということを考えており、道後温泉アート 2014 に関わることになりました。皆さんご存じの道後温泉アートですが、ワコールアートセンターという中央の大きなところが総合プロデュースをしましたが、我々を含む地元の NPO やイベント会社がコンソーシアムを組んで道後アートプラットフォームとして地元の受け皿を担いました。

一方で、私のもう 1 つの仕事である地域の文化施設の運営をお手伝いするスタッフの観点から、茅野市民館の主催事業の「ばらのおはなし」という今年 1 月の公演をご紹介します。

先ほど伊東さんから話がありましたように、茅野市民館は 2005 年開館で市民との協働で計画がされ、現在も市民の意思が直接的に反映する運営形態が維持されています。3 年目から茅野市民館をサポートする取り組みを始めました。最初はサポートでしたが、2012 年からは、プロフェッショナルやスタッフが応援する「ステージづくり応援部」がスタートしました。これは、舞台に立つ人たちのマネジメントから自ら舞台に立つということまで構成するもので、制作・舞台技術・脚本・演出などをプロの指導のもとで取り組むという内容でした。

2014 年の事業企画提案では、自主的な公演を複数企画提案した市民が共同で ACT・B という組織を結成しました。脚本・演出・出演・照明音響プラン・オペレーションなど、すべて市民が行い、実際に進行しているときにはプロやスタッフは見守り、アドバイスする形になっています。その取り組みで、サン・テグジュペリの「星の王子さま」という原作を使った「ばらのおはなし」という公演が実現しました。11 月 23 日には、市民主導で茅野市民館 10 周年公演が予定されています。

茅野市民館のスタッフの中に地域新聞の記者をしていた人がおり、そのスタッフが「ばら通信」という新聞を作成しました。全部で 10 号出しましたが、よく出来ています。

これは舞台の最初のシーンですが、真ん中の車いすに座っている方は進行性の重い病気を抱えています。「俺、車いすで舞台上で踊りたい」という思いをみんなで実現するという、とても美しいスタートになりました。

地域のアート活動と公共文化施設はどちらかが指導関係になるということではなく、化学反応が起きるといいな、相互作用が起きるといいなと思います。芸術文化を活用した手法で地域の課題が解決されるといいなと思います。

本杉先生のお話を引き継ぐと、何か創造的なことを起こしたいと思った人たちが、その文化施設に行けば何かアドバイスがもらえる、誰かに出会える、スタッフに助けてもらえる、人脈を紹介してもらえる、そして何かを作ることができるというのがいいかなと思います。市民参加というのは、施設と市民がお互いに責任を取りながら、言ったらやる、やるのだったらこういうふうにもっとうまくやろうという体制ができるといいなと両方に関わっていて思います。

【永井】

永井由起と申します。松山駅周辺まちづくり審議会の委員を務めていました。愛媛県建築士会女性委員会の委員も務めさせていただいております。

今治市で育ったのですが、大学を卒業後に、主に住宅を設計する建築設計事務所に勤め、結婚で愛媛に戻って、現在は松山市に住んでいます。

松山市の印象を申し上げますと、コンパクトで便利なまちであり、市内電車・郊外電車・バスも充実しておりますし、まちなかに出やすい非常に住民にとって暮らしやすいまちであると思っています。まちなかは比較的アップダウンもないので、自転車の移動も非常に楽しいまちではないかと思います。よろしくお願いします。

【加藤】

最後になりましたが、コーディネーターを務めます加藤武志と申します。よろしくお願いします。

仕事はソーシャルデザインという非常にわかりにくい仕事をしていまして、先ほど本杉先生や徳永さんもおっしゃったように、人や自分のまちや組織をよりよくするための課題解決のお手伝いの仕事をしています。

僕は広島県の因島の出身です。また、僕は母が愛媛だったので、何%かはここの血が僕の中に入っているのかなと思って、今日は嬉しくやって来ました。よろしくお願いします。

先ほどから「市民参画」や本杉先生の「公共のため」という言葉が出ています。市民自身が与えられるものではなくて、自ら主体的に関わっていかなければクリエイティブにはならないということだと思いますので、市民参画をテーマに少し話をしてみたいと思います。

今日、基調講演の前に事務局から基本構想の説明があったと思うのですが、その一部のまちづくり審議会を私もお手伝いをさせていただきました。普通、皆さん審議会というどんなイメージをお持ちでしょうか。事務局案が作成されていて、説明を受けてそれを承認するような流れが普通だと思いますが、今回はそうではなく、ゼロベースで取り組みました。松山駅の近くにどのようなものがあたらいいだろう、どのような活動ができたらいのだろうという観点から、そのなかで車両基地ではどのような機能が望まれるかを学識経験者や永井さんのように市民の方、それから地権者に関わる人等も14人くらい集まって話し合いをしました。2回目では別に何かお題を与えたわけでもないのに、敷地中の平面イメージや断面イメージが提案されて、3回目で中間まとめとしてこの14人の意見をまとめて市に提案したのを覚えています。

先ほど伊東さんが基本計画で50回以上のワークショップを開催したとおっしゃいましたが、その前段階の基本構想においても、松山市では審議会の中でワークショップをやっていますし、このようにシンポジウムも開催されています。ことあるごとに松山市は市民の方に取り組みの内容を知っていただくように進められているのだろーと思われま。

また、パブリックコメントでは意見が189件寄せられたそうですが、会場の中で意見を提出した方はどの程度いらっしゃいますか。このような事案で、ここまでたくさんの意見をいただくことはなかなかないと思います。

永井さんが基本構想づくりに関わっておられましたので、そのときの様子や率直な感想などをお聞かせ願えればと思います。

【永井】

審議会は全部で7回開催されました。最初の3回が加藤さんによるワークショップ形式、駅周辺に欲しい機能についてフリートークに近い形で話し合いがなされました。4回目以降は県内外の既存の施設

を参考にしながら、より具体的に駅周辺に本当に必要なものは何かを話し合いました。

まず最初の3回で話し合われた駅周辺に欲しい機能については、シンボルになるもの、みかんタワーみたいな大きいもの、幅広い年代にわたって交流できる施設、図書館、県産品を販売・紹介するところ、カフェ、ホール、広場、駐車場・駐輪場などの意見が挙げられました。これらのコンセプトをつなぎ合わせた結果がキャッチコピーになりまして「だんだんつながるいいよかん・松山らしさのすべてはココから！」というものになりました。このキャッチコピーをもとに、4回目以降、より具体的な話し合いが行われました。

この施設に求められる機能、キーワードにもある「松山らしさ」、それらを表すデザイン、その施設の運営の仕方、施設に併設が想定されるホールについての約5つの項目に分けて活発な意見が出されました。

機能については、俳句などの文化を重要なキーワードとして、文化を消費するのではなく、経済や芸術をベースとした生産的な市民活動の交流拠点にしていく必要があるという話がありました。松山駅から発信するだけでなく、駅に向かっていくという意識も高めたほうがいいのではないかという話もありました。

「松山らしさ」については、近代的なまちでありながらも、道後温泉や松山城、路面電車などの歴史的なものが存在する古くて新しいまちといった意見が出ました。また一方で、既にある松山らしさだけではなくて、市民自らが見つけたこれからの松山らしさを創造していく必要もあるという話も出ました。

デザインについては、可能ならば県と市、JR 四国で共通で利用できるデザインコードを作るのが理想ではないか、また、駅周辺から大手町通りを経てまちなかへつながっていくまちのストーリーをできるだけデザインで表したい、レトロな手法や近代的な手法の両方を考えてもハリボテでは意味がない、本物のものを使ってほしい、見る人がわかるようなものを取り入れてほしいという希望がありました。

施設が完成してから15年・20年経ちますと次は補修が必要になります。その際、その時代に合わせた用途変更など、可変できるような設計が求められるのではないかと意見が出ました。

運営については、事業化を含めて考える必要があり、管理業者が使用者である市民の意見を継続的に反映できる仕組みづくりが重要であるという意見が出ました。

併設されるホールについては、敷地的な問題もあり、コンパクトで使いやすいものがよくて、周辺のコミュニティセンターやひめぎんホール、将来そう遠くない時に耐用年数をむかえる市民会館などとの役割分担が求められるのではないかと意見が出されました。

また多目的がすべてよいとは限らず、音響設備や演劇など、非常にレベル・質が高く、文化的にいいとされるものを望む声もありました。

7回の審議会をすべて紹介するのは難しいですが、このようになりました。

【加藤】

ありがとうございました。今のデザインコードや本物志向の材料の内容は手元の基本構想の概要にはあまり載っていないと思うので、貴重なご意見だと私は思いました。今の松山の話なのですが、徳永さんは、伊予市をはじめ他市でいろいろな市民参加のプロジェクトに携わっておられますので、ちょっとそういう事例とか経験を紹介していただけますか。

【徳永】

基本的に市民参加はものすごく大変です。ものすごく大変というのは、皆さんそれぞれ思いがものすごく強いんです。それぞれ皆さん非常に自由な文化観や芸術観をお持ちになっているので、一遍全部皆さんに意見を出していただかないと困ります。

具体的な話では、演劇やダンス関係の人は中が真っ黒のホールが欲しくて、音楽関係の人は客席で演奏中に本が読めるぐらいの明るさのホールが欲しいとおっしゃるんです。これは皆さんの思いなので、とりあえずは一遍全部だしていただき、その結果にそれぞれが自己主張を始めるのでまとりません。それでも、それを一遍全部だしていただかないと、お互いの理解に繋がりません。

市民参加は実はこのような場がとても大切だと思っています。これが十何人の規模でも茅野のように週に 2 回ワークショップを開催すると大きな負担になって、本当にきつかったです。19 時半に始まって、夜中の 1 時半に終わったことがあります。そのような状況をみんなで経験しながら、お金の面も含めて具体的な議論をしました。

しかし、実態はなかなか上手く行きません。時間も決まっていますし、市民が参加するにもそれなりに覚悟をしていただくしかないと思っています。

【加藤】

ありがとうございます。市民参加には覚悟が要とのことでしたが、伊東さんも全国で様々なホールを手掛けていらして、ご自身のお仕事の中で、経験の中で感じられることや参画についてご紹介いただけますか。

【伊東】

まず今日どうしてこんなに集まっていたのか、本当にびっくりしています。この夏のいい時期、皆さんお忙しいでしょう。

【加藤】

若い人も多いですね。すごいびっくりしました。

【伊東】

このシンポジウムは、下手な芝居よりもはるかに動員力があるという、すごい状況だなと思っています。市民参加を行うとき、我々は行政からお仕事をいただいて進めますが、まずは行政と市民との信頼関係が重要です。信用していない人も多いですね。どうせ行政はアリバイづくりでやっているに違いないとか、意見の中身を聞きたいのではなくて、こういう場を作ることが目的なんだと思いがちですよ。それを打破するために僕は徹底的にやるんです。それは回数をこなして信じあうことが大事です。

最初皆さんは、市はどう考えているんですかというような疑問ばかり出てくるんですね。僕らは、皆さんはどうしたいんですか、皆さんは何が欲しいんですか、それを聞きたいんですね。まずそれを聞く場をつくりたいと思っています。

今この会場に 100 人以上いらっしゃると思いますが、皆さんに聞いたら、同じ意見の人は少ないと思うんです。でも、できるホールの席数は 1 つに決まるわけです。だから、1000 の要望を出しても、通るのは 1 つか 2 つかもしれない、でもそれは根気強く意見を出してもらわなくてはいけないんです。

北上での年末年始のカウントダウンイベントや金沢市民芸術村の公共ホールが 24 時間 365 日営業し

ている状況も普通ではあり得ません。でも、そうなってほしいという人がいたからこそできたんです。ですので、まずは皆さんが何をしたいかという要望を出すことから始まると思うんです。要望すれば通ると思ったら大間違いですが、逆に言えば、意見を出さない限りは1つも通らないということなんです。

まずはアイデアを出していただきたいのですが、それが決まったときには、今度はアイデアを出した人たちが責任を持つ必要があるんですね。茅野のときもそうでした。市長は、言った以上は市民が責任を持つように言います。市長は金や議会对策の責任を持つ、市民はやりたいことを実現する以上は責任を持ってということをおっしゃった。だからこそ今、アート NPO を作って市民の皆さんが運営に参加しています。そういういい関係づくりが重要です。

僕は、これって自分の子どもを産むようなものだなと思っています。伊予市でも、産まれるまでのところは一生懸命お手伝いして産みの親にはなれるんですが、なかなか育ての親になれないんですね。それは伊予市民ではないし、常時そこにいるわけではない。でも市民の皆さんというのは育ての親になれるわけです。ですので、産みの親と育ての親がいい連携を保ちながら、施設を育てていく環境を作っていかなければならず、そのためのきっかけをいかに早い段階で作ることができるか、それがポイントだと思っています。

【加藤】

ありがとうございます。では、今のお三方の話を受けて、本杉先生、何かコメントがありましたらお願いします。

【本杉】

ちょっと言いにくいことから先に話すと、僕はあまり住民参加って好きじゃないんですよ。自分たちの言うことを聞けないのかという態度でくる人がいる、そういう態度が好きじゃないという意味です。

パブリックスペースというのは、劇場も含めて、他者との関係づくりが大事です。他者を認め合うことを前提に、参加してこないと成り立たないということですが、ときどきそうじゃない人がいらして、本当に言葉に困ってしまうという場合があります。

伊東さんが、要望を出したほうが良いとおっしゃいましたが、欲しいものを作るのではなくて、必要なものを作るべきだと思っています。往々にして、欲しいものの要望を出してしまいがちですが、私たちのまち、あるいは我々の活動にとって必要なものは何かというふうに考えるべきです。とても大事なものは、さっき茅野市の市長さんが責任を持ってというふうに言ったことと一緒に、みんなのお金ですから、「欲しい」ではなくて「必要」ということによって、裏付けられたものが大事だと思うんです。

例えば 500 人のホールが欲しいと言っている人に、どの程度使うんですかと聞くと、300 人ぐらいがせいぜいという回答がきます。しかし、500 人のほうが格好いいと思い込んでしまっています。本当に必要なものは、自分たちが集められるぐらいの規模でいいのではないかと思います。それがちょっと見栄を張ってしまうところが日本人にはあって、そこは少し考えなければならないと思います。他者ということ、必要ということが皆さんで話し合うときの大事なキーワードではないかと思います。

【加藤】

ありがとうございます。他者と必要なものというキーワードで、要望だけしては駄目という話ですね。責任を持つというキーワードも出ました。

では今度はもう一巡したいと思います。駅の一番いい場所に拠点を作ろうとされていて、その核になるのがホールや広場ということです。これから松山で市民が交流して、松山の顔として元気な場所にしていいため、このホールや広場はどういうあり方だったらいいのかというのが最後のこのラウンドで話したいと思います。地元松山のことに詳しい徳永さんから、実際に関わる人や団体、その活動の状況についてご紹介いただければと思います。

【徳永】

松山は、もともと文学によるまちづくりが文化庁長官賞を受けたように、比較的伝統的な文化芸術が盛んです。音楽でも比較的保守的なクラシック音楽等が盛んで、それなりにユーザーがいます。また、クラシック音楽も演劇も市民の鑑賞団体が活動しています。これも珍しいですね。

自ら演じるほうは遅れていると言われていましたが、シアターねこという小劇場などもできて、盛んになりつつあります。また、全国的に見ると、コンテンポラリーダンスがすごく盛んなところで、札幌や福岡並みのマーケットがあると言われています。

今ある芸術文化活動のニーズに応じて文化施設を作るということも大切だと思いますが、それだけでなく、需要を掘り起こしてそこからどの程度新しい方向へ向くかがとても大切だと思っています。

例えば淡路人形座というところで新しいチャレンジをしています。年に1回、途絶えてしまったお話の復活公演にチャレンジすると、今まで興味がないと言っていた地元の人形浄瑠璃の昔ファンだった人たちが来てくれます。それは、伝統芸能でもそこにクリエイティビティを感じるからですね。

茅野の場合でも、隣の諏訪市が全国的な舞踊賞を持っているまちなので、ダンスや演劇とか隣に任せておけばいいという話もでしたが、新たな掘り起こしにチャレンジすると、今までそういった輪から外れていた人たちがすごく積極的に参加してくださいました。

劇場では、江戸時代ですら身分が違う人が1つのものを楽しむということが起きるんですね。わかりやすく言えば、社会的にやや阻害されていると思われる人でも、そこに来れば同じようにいきいき活動できるということです。障がいを持っている人や地域の外国人も、劇場へ行けばわかるものがあるということです。

茅野の車いすの方もそうですし、未就学児もそうだと思います。どの文化施設でも未就学児はお断りだったりして、お母さんもお父さんもストレスを溜めていて、確実にニーズがあるよと言われたことがあります。その結果として、茅野では、「小さな子どもの素敵な時間」というイベントが実現していききました。毎年それを楽しみにしている人たちが地域に受け継がれており、お母さんと子どもたちが一緒に楽しめる質の高い内容となっているために、もう5年も6年も続いています。

市民参加の場合には、こんな文化施設は要らないよと思込んでいる人たちにぜひ参加していただきたいと思います。例えば病院や老人福祉施設が欲しいとかおっしゃる方からもあつてよかったと思ってもらえるような文化施設以外は作っても意味がないと思っています。いわきアリオスは、計画の段階からそのような人に関わってもらったために紛糾した場面があったそうですが、それも必要なことだと思います。このように幅広い市民参加を経て、社会的な課題にきちんと向き合う文化交流施設になるといいなと思っています。

【加藤】

ありがとうございます。では、永井さん、地元でもありますし、市民としてあの場所にどういったホ

ールや広場があると使ってみたいとか、効果が生まれるとか、その辺のご意見を伺いたいと思います。

【永井】

私個人は演劇や音楽の活動をする側ではないので、もし活動する側であったとしたら、練習する場や発表する場ができるだけ安い価格で借りられるとありがたいと思います。もちろん無料で貸してよというご意見もあるかと思うのですが、維持管理にもお金がかかるわけですから、ある程度の使用料を支払いますが、それがあまり高くないものであるとありがたいなと思います。

また、社会人でサークル活動をしようとする夕方や夜になってしまいますが、そんなときでも使わせてもらえるような仕組みがあるとありがたいと思います。

また、どのような活動がされているのか、我々は実は知らないと思います。例えば、視覚的には通るけれども音は漏れないというような閉鎖しすぎない空間であると、活動が見えて参加しようというような気分になるように思います。例えばですが、今日・明日で俳句甲子園が行われています。大街道で市民も見ている中で勝負がついたり、明日はコミュニティセンターに移って決勝が行われると聞いています。そのように施設で収まってしまうのではなく、まちと施設が相互作用の関係になるのが活性化の1つの方法ではないかなと思っています。

もちろん、特別なイベントがなくても行ける空間であってほしいです。イベントがないときは閑散としているふうにはしたくありません。何もなくても行ってみようかと思えるような空間であることを一市民として望みます。

【加藤】

ありがとうございました。では、伊東さん、先ほど実績の中でホールを作るだけではなくて、管理運営もやっているという話がありました。それと、先ほど永井さんから使用料の話題も出していただきました。おそらくこのようなホールは作るだけではなく、その後の管理運営や費用の話がついて回ります。どのようにマネジメントしていくのかというのが問われていると思うのですが、そのあたりについてはどうでしょうか。

【伊東】

公立ホールは、市民・納税者・舞台芸術関係者、誰のものでしょうか。その捉え方が、一般的には舞台芸術に関心のある方、作り手と観客が一義的な利用者みたいに思われがちだと思いますが、そういうホールは今作ろうとしても難しいです。ですから、基本コンセプトの中には必ず舞台芸術の振興以外に、まちづくりや人づくりということが入っていて、一人でも多くの市民・納税者のために貢献する施設にしようという話になっていると思います。

実際に今日もたくさんの方に集まっていますが、皆さんは市民の代表でしょうか。その意見だけで決められるのでしょうか。そのところがすごく難しいですね。やはり文化団体の方の声は大きいでしょうし、重要だと思いますが、例えば音楽関係の方は、コンサート専用ホールが欲しい、一方、演劇関係の方は、音があまり響かず照明の効果が得られる真っ暗にできる空間がいいとなったとき、どう判断すればいいのでしょうか。このようにたくさん抱えているわけです。そこをまとめていくために、とにかく要望を出して、みんなで決めましょうよということなんです。

そこには、たいてい行政がいて、審議をしているときにはずっと黙っていても、最後に「こうします」

と決めることが多いですが、それがよくないですね。ですので、行政としてやりたい思いを議論に参加してもらわなくてはいけないと思っています。

もともと公共ホールは、民間の施設と違って、イニシャルコストを稼ぐという考えはないですね。では、1年間にかかるお金は、皆さんがお使いになる利用料金で賄えていると思いますか。もしそのような金額設定をすれば、誰も借りられなくなります。もともとすごく安く貸しているにもかかわらず、さらに自分たちの団体には安く貸してほしいということは、公平性や平等性の点では疑問です。その団体が安いなら、一体誰が高く払うべきなのでしょう。文化協会に参加していない若いバンドの方々が高い料金を払うべきでしょうか。そのようなことを考えなければいけないですね。

かかるお金はかかる中で、利用料を安く利用した場合に、そのお金は誰が負担しているのでしょうか。それは税金でカバーしなければならないわけですね。というところを見据えながら考えていく必要があって、それが一部の特定の舞台芸術の愛好者や作り手の側、見る側の方たちだけの施設であってはいけないということです。となれば、新しく作るスペースは、新しい観客を育てる場であったり、新しい創造主を生み出す場所であったりと、新しいジャンルにつながって、それが松山らしいものにつながっていくのではないかと思うんです。

ですから、自分の思いだけをぶつけるのではなくて、自由に意見を言っているほかの人の言葉を真摯に受け止めて、一緒に協議をして、最終的な結論を導いていくというようなプロセスこそが大事で、その中にはでき上がった後の運営や市民の関わりを見据えなければならないと思います。

【加藤】

ありがとうございます。では、本杉先生、これから施設単体で何かをということだけではなくて、まちが劇場、劇場がまちという双方向のお話もありました。エリアマネジメントやお金の内容を含めてコメントをいただけたらと思います。

【本杉】

この基本構想の中でいいなと思ったことは、公共施設マネジメントといって、今までは各部署で面倒を見ていた公共施設を、もうちょっと行政全体で、県なら県、町なら町全体で見ましようという視点が入っていることです。このことは非常に重要と思っています。

公共建築で床面積として一番多いのは学校建築です。美術館や劇場、ホールは面積としては少ないですが、政治的な関心としては高くなります。文化施設の内容や工事費の関係で政治が動いて、施設整備がご破算になった例もあります。そうならないために、継続的なあり方というのはとても大事で、行政の中からその施設に長期的に出せるお金を把握しておかなければならないし、そこから逆に施設や運営を考えていくということが大事なことになるのではないかと思うんです。

例えばオスロのオペラハウス、イギリスのウエストヨークシャー・プレイハウスという事例をお示しました。ウエストヨークシャー・プレイハウスは、オスロのオペラハウスに比べると安い建築です。どちらがいいかは皆さんが決めることだと思いますが、私としては質の高い施設、質の高い運営をしてほしいと思います。そのためには見合った規模や事業費が必要で、お金はある程度かけないと質の高い施設はできませんし、お金をかけなければ運営に関わる人も集められません。そのような全体のバランスをうまく考えていくという仕組みは非常に重要だと思います。一般の方たちでは、それを厳密に積算することもできないし、専門家を知っているわけでもないのに、それでも、その感覚が大事なんだとい

う認識を持ちながらお話をすることは必要ではないかと思います。

もう1つは、ホールのような機能は、図書館や美術館などにもいくつか必ずあります。ですから、そういう既存の施設や類似施設にある同様な施設と総合的に考えていくということが大事です。不十分だからと壊して新しいものをつくるということではなく、十分になるようにお金をある程度かけて改修して使っていくということが大事だと思うんです。

質の高い運営をしていくためには、長続きできる施設にしなければなりません、高度成長期にできた施設はどちらかというと安くできている。ヨーロッパでは例えば50年ぐらいたっていてもまだ新しい部類に入っており、100年以上たたなければ古いなんて言われませんが、日本では50年たっていると古いと言われてしまいます。

もう1つ最後に言いたいのは、よくいろいろなまちに行くと、「らしさ」と言われます。僕が自分で住んでいるまちでも「らしさ」と言われてもどういうことなのか、分からないですね。何年も住んでも、言葉や形で表現するのは難しいです。でも、どこかに行くと必ず「らしさ」と言われます。これはすごく考えなければならないことではないかなと思います。建築をやっている私たちからすると、行くたびに「らしさ」と言われます。そのイメージが具体的にあるならば言葉や形で示していただけるとよりいいと思っています。

【加藤】

ありがとうございます。これでパネラーの方々から用意していたセッションについてご意見をいただきました。いくつか重要なキーワードが得られたと思いますので、僕なりに覚えているものを挙げたいと思います。

1つ目は、市民参画の仕方について徳永さんの「結構大変だよ」という言葉に象徴されていると思います。文句を言うだけではなくて、自分から変えられることを見つけよう、そのようなクリエイティブな視点に立ってもらえるかがとても重要なポイントです。僕はそれを当事者化と呼んでいます、当事者になって対話をしたか、そうでないかは、同じ時間会話をしても結果が違ってきます。ただ文句を言うだけでなく、自分が責任を持って運営に関わるという話がありましたが、その部分が重要であると思います。

それから2つ目ですが、「信頼関係」と伊東さんが言われましたし、「他者との関係性」と本杉先生が言われました。要求型や批判型ではなく、自分から提案型で話していただけると意味が違って聞こえてきて、それはコミュニケーションの一番根幹の部分だと思うんです。家庭の間でも、「そんなことをするな」というと腹が立ってしましますが、「こうしたらどう？」というちょっと意味が違って聞こえると思うんです。複雑な権利関係があるプロジェクトになるとなおさらで、立場をちゃんとわきまえて信頼関係を築きながら関わるということがすごく重要なことかなと思います。責任を持つと出ていましたが、言ったことには責任を持ち、育ての親をつなげていくということがすごく大事なのかなと思っています。

それから、徳永さんの「ここにいる人、今まで関わった人だけの話を聞くんじゃない」というのがポイントだと思っています。僕もバンドをやっていて、公共ホールよりライブハウスが好きでしたが、きっかけがあって公共ホールに出入りするようになると、もっと自分たちらしく使える方法があるのではないかなと思うようになりました。与えられたものではなくて、自分たちで使いこなしていく、楽しんでいく、面白がっていくという力があれば、どんなものであってもきっとすごく上手に使えると思うんです。

す。そのためには今日若い人がたくさん来てくださっていると思うのですが、今まで私たちは使っていたから、使いやすいようにしてくださいという声だけでなく、「あんなハコモノを作って」と思っているような友達を巻き込んで、新しいあり方を考えていただきたいと思います。もしかすると、松山の中での、ひょっとしたら新しいムーブメントが生まれるかもしれません。

それから、永井さんが言われた、「俳句甲子園」ですが、まちが劇場になる、劇場がまちになる、双方向の行き来があって、その活動が見えることが大事だと思います。機能が分散していて、そこを往来できるような仕掛けがなければ、素敵なことは起こりえないので、その点を見える化して、分散したものをつなげていく。

いずれにしてもお金も潤沢ではないですし、お子さんも松山でさえ減っているとさっき伺いました。その中で新しい価値を生み出すきっかけができれば、今日集まった意味があるのかなと思います。

そこで、今から 2 分間だけお近くの席の人とおしゃべりしてもらっていいですか。

(おしゃべりタイム)

【加藤】

ちょうど 2 分になりました。お話をした人は初対面の人やよく一緒に過ごしている人もいますが、握手をしてもらっていいですか。ありがとうございました。

ここからは皆さんの時間です。皆さんが主役のシンポジウムなので、聞いてみたいことがあればどんな手を挙げていただければと思います。時間は限られていますので、早い者勝ちです。

【参加者①】

徳永さんが話していただいた障がい者のことについてです。障がい者の人が行ける劇場が松山には少ないんです。例えば今日本で障がい者の生まれる確率というのは 100 人に対して 3 人の割合となります。松山の 50 万人に対してざっくり計算すると 1 万 5000 人ほどの障がいを抱えた子どもたちや、介抱をしている両親がいると思うんです。そういった方々が行けるホールをちょっと考えていただけたらと思います。できれば例えば室内がフラットになっていて、外側には声が漏れないけれども、内側からはガラスで見れるとか、そのようなホールをできれば松山に作っていただきたいと思います。そうすれば、今の劇場の利用者数に加えて、障がいをお持ちの方も利用できるようになり、今まで狙っていた客層以外の新しいお客も入ってくる確率が高まると思います。いかがでしょうか。

【加藤】

ありがとうございます。徳永さん、お願いします。

【徳永】

1 つは施設をバリアフリーにするなど、様々な障がいを持っている方にとって居心地のいい場所にするというのがあります。もう 1 つは、文化施設の大切な機能として、そういった人たちが日常的に来ていることによって、このまちには様々な立場で生きている人たちがいるということを知ってもらい、同じ劇場空間の中で同じものを楽しむ、ないしはその人たちと一緒にプロジェクトをやって楽しむという 2 つの面があると思うんです。

1つ目は建築や運営プランで考えられます。2つ目については、茅野で一昨年から「みんなのひろば」というタイトルで、市民館を起点に市内各所を半日回るプロジェクトもしています。人口5万6000の小さなまちですが様々な人がいて、トランペットがとても上手い人も実は障がいを持っているということも教えてもらえたり、出会いの場になるということですね。出会いはホールの中であつたり外であつたりしますが、公共施設があることによって出会いにつながります。様々な形で居場所がない人たちがチャレンジできる場所だといいなと思っています。

【加藤】

ありがとうございます。それでは次の方どうぞ。

【参加者②】

よろしくお願いします。未来に向けてどういうものを作っていくかというのは、これは市民の責任でもあると思っています。そのためには、市民参画でやっていくべきだと思っています。基本計画に入るまでに一体どのぐらい時間が残っているのか知りたいと思っています。こういう場を作るということはとても大変なことだと思うのですが、何とか踏ん張っていただきたいです。そして、そのために我々はどうのように動けばいいのか、時間はどのぐらいあるのか、教えていただければと思います。

【加藤】

これは事務局に聞いてみたいと思います。基本計画に入るまでの時間と市民のかかわる余地ということですね。

【事務局】

直接この事業を担当している松山駅周辺整備課の課長の尾崎です。本日は皆さんたくさんお集まりいただきましてありがとうございます。

先ほどの質問の件ですが、愛媛県によると新車両基地への移転が平成31年度中の完了を目指すということですので、その後に車両基地の跡地を取得して施設の建設を進めてまいります。ですから、まだ明確にいつごろまでに作るというのはこれから検討していくことです。

先生方から指摘されておりますように、市民参加は非常に重要だと私どもも思っています。ですから、広く市民の皆さんに知っていただくためにこのシンポジウムも繰り返し行い、また、ホームページに資料等を掲載して、広く市民の方々の目に触れるようにしております。

今後、市民参画をしながら、基本計画を作っていくといけません。具体的にどう進めるかも検討して、いい施設を作りたいと考えています。これからみんながわくわくするような施設、それが必要だと思っていますので、その施設づくりを皆さんと一緒にやっていきたいと思っています。

【加藤】

よろしいですか。本当は皆さんから声を聞きたかったのですが、時間ということで、ここで終わりたいと思います。もう一度パネラーに拍手をお願いします。

以上